私はわたし、あなたはあなた

甲斐市立敷島中学校二年　　牧野　莉奈

「だから女はダメなんだ」この衝撃的な言葉は今年の春、私の祖父から発せられたものだ。些細な意見のくい違い、考えの相違から、考えを改めるよう祖父から言われた私の母がそれを拒否したことが発端だ。

この発言を投げかけられた母はもちろん、隣で聞いていた私や姉も激怒したことは言うまでもない。男女平等があたり前となった現代、こんな言葉を実際に生で聞くのは初めてだった。親しい友人に聞いてみても同様だ。怒りがおさまらない私と姉に対し母は「年配の人の中にはどうしても男が偉くて女は従うものと考え続ける人がいる。放っておけばいい。」と言っていた。しかし私はどうしても納得できなかった。

怒りがおさまらない私が考えたのは、“自分らしさ”ということだ。最近になり姉の通う高校で女子の制服にスカート又はズボンが選べるようになった話を思い出した。“男はズボン、女はスカート”という固定概念をやめ、自由に選べるようになったそうだ。近年は社会全体でもジェンダーレスが叫ばれ、性別による差別や偏見をなくし、全ての人々が対等に生きていく社会を、というような空気を感じる。しかし実際はどうだろうか。私の祖父のような考えを持っている人は、まだ多くいると思う。年配の人だけでない。例えば育児休業を考えてみても、父親が育児休業を取得するケースは、とても少ないと聞く。私や姉が体調不良で学校を休む時、仕事を休んで付き添うのは、いつも母だ。男も女も、全ての人は平等だと口で言うのは簡単だが、それを実現し、体感できる社会はまだ先のような気がする。

実現はまだ先だからと言って、諦めてる訳ではない。私たち、若い世代ができることは何だろう、と考えてみた。そしてその問題に対する私なりの答えは「違いを認める」ということだ。当然のことだが、私と私の周囲の人は、顔も違う。背の高さも、性別も、考え方も、皆それぞれだ。同じ世代が集まり、毎日顔を合わせる学校の友人たちも同様だ。“スクールカースト”という言葉をインターネットで見たことがある。学校やクラス内で自然にできあがる序列のことだ。一軍、二軍、三軍とも言うらしい。これを知った時、くだらないと思う反面、そういったことを気にしてしまう自分に気付いた。私たち世代の友人関係は複雑だ。空気を読んで上手く学校生活を渡り歩く。出すぎず、かといって

引っ込みすぎず、我ながら大変な日々だ。もちろん大変なことばかりでなく、私は良き友人や先生に恵まれ、楽しい日々を送っている。しかし中には理由もなくいじめられたり、仲間はずれにされたりする人が多くいるのが現実だ。いじめ問題を考える時、“いじめられる側にも原因がある。”という意見を目にすることがある。しかし私は違うと思う。人はそれぞれ違う生き物だ。違う顔、違う性格、違う体形、すべて違って当然だ。その違いを認めようとしない気持ちとまだ大人になり切れない未熟な精神が相まって、いじめという不幸な事態になってしまうのではないだろうか。いじめられる人の苦悩はもちろん、いじめている人もいずれ確実に不幸になる。いじめは誰も幸せにしない。

小さい頃読んでもらった本の中に、金子みすゞさんの「私と小鳥と鈴と」という詩がある。私がよく見ていた幼児向け番組で取り上げられていたこともあり、この詩のことはよく覚えている。「みんな違って、みんないい。」なんて心温まることばだろう。中学生になった今、あらためてこの詩を読み、童謡も聞いてみた。久しぶりに触れたこの詩は、私は私でいい、あなたはあなたでいい。人間、動物、この世に存在する全ては等しく平等で、それだけで美しく、尊い存在なのだ、と語りかけてくれるような気がする。

暗いニュースが世を騒がせる昨今、その多くはそれぞれの違いを認め合えないことから起こるのではないだろうか。中学生の私に世界を変えることはできないけれど、できないことばかりではない。外見や性別、年齢や人種、みんな違って当然だ。違いを認めあい、お互いを尊重し、思いやる心。ひとりひとりが心がけることによって、世の中はきっと変わり、誰もが自分らしく暮らせる。そんな世界にきっとなる。その世界をつくるのは、私たちだ。